



新年のご挨拶



病院長 小池 和彦

新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひ申し上げます。

今年は十干が「壬(みずのえ)」、十二支が「寅」の年にあたるので、干支(えと)は「壬寅(みずのえとら)」だそうです。「壬」は「妊に通じ、陽気を下に妊(はら)む」、「寅」は「蟻(ミミズ)に通じ、春の草木が生ずる」という意味があるそうで、「壬寅」は厳しい冬を越えて、芽吹き始め、新しい成長の礎となるイメージとされています。誰しもが、このイメージ通りに、ウィズ(with)・コロナの厳しい冬の時代から、ビヨンド(beyond)・コロナの新しい時代へと、一刻も早く移ってほしいと望んでいるのではないのでしょうか。

昨年を振り返ってみますと、やはり新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の話題が中心になってまいります。令和3年の新年は、第3波の最中に迎えました。第3波を過ぎると、ワクチン接種が開始されたこともあり、医療機関におけるCOVID-19への対応策、特に感染対策が固まってきた様に思います。しかしながら、5月の第4波を過ぎ、8月の第5波での市中感染状況は混乱を極めました。少なくとも東京では、COVID-19だけではなく、一般の救急医療が崩壊状態に陥りました。救急車による搬送体制がマヒしてしまい、本当に危険な状況でした。

その後の状況は皆様ご存じの通りで、日本では新規感染者数の少ない状況が1カ月以上続いています。街も賑わいを取り戻しつつありますが、従来のワクチンの効果が出にくいともいわれるオミクロン株が拡がってきており、基本的な感染対策をしっかりと守ることが重要と思われれます。弱毒株化し、COVID-19収束への道筋となることを願うばかりです。

ところで、オミクロン株や第5波時に猛威を振るったデルタ株など、新型コロナウイルスの株はなぜギリシャ語で呼ばれているのでしょうか？実は、WHOは新たに見つかった病気の名前に地名や人名、職業に関連した名前、動物や食品の名前などを使用しないようにと、2015年から勧告しています。今回の新型コロナウイルスは2019年に見つかったウイルスなので、この指針に従っている形です。この話で(日本では)有名なものに、ノロウイルスがあります。冬季に流行する急性胃腸炎の原因ウイルスで、感染性が高いのが特徴です。このウイルスは、当初、このウイルスが発見された流行地である米国オハイオ州ノーウォーク地方の小学校に因んで「ノーウォーク・ウイルス」あるいは「ノーウォーク様ウイルス」と名付けられていました。しかし、特定の地域名や人名は差別の元になること、「ノーウォーク様ウイルス」は長過ぎるなどの事情で「ノロウイルス」と改名されました。日本で有名になったのは、日本には「野呂」という名字があり、2万人近くの野呂姓の人がおられる(名字由来netによる)からでした。この件について、抗議がウイルス分類国際委員会(ICTV)へ送られたと聞いていますが、現在までにウイルス名称の変更はされていません。なお、「なぜギリシャ語アルファベットなのか？」という問いにWHOは「特に理由はない」と答えているそうです。 α や β などのギリシャ語アルファベットは、医科学において昔からよく使用されているということの様です。

今年は、新型コロナウイルス感染症COVID-19の収束への道筋が見えてくるかもしれません。ビヨンド・コロナ時代における生活、仕事、イベント、社会の在り方、医療の在り方などに思いを馳せながら、手洗い、適性なるマスク使用、換気など現在取りうる対策を遵守して参りましょう。